

富來先生と私

佐藤 節

昭和二十五年、大分大学へ入学した私は、古文書演習を受講した。当時、渡辺澄夫先生は東京大学へ内地留学中で、古文書の指導教官は、東大史料編纂所に勤められたことのある富來先生であった。若い頃の富來先生は点が辛く、前年度の古文書の受講者の半分は欠点であった。そのためか、この年の受講者は、前・後期とも私一人であった。それが縁で、富來先生の指導を受けるようになった。

在学中は、よく富來先生のお供をして竹長賢治君らと県内各地の調査に歩きまわった。姫島には、卒業後もふくめて五回ほど行った。奥さんが富來先生の遠縁にあたる山下清風さんの家に泊めていただいて、暖かいもてなしを受けた思い出が今も鮮やかである。

卒業した二十九年、『大分県地方史』が刊行された。富來先生にすすめられて第三号に「近世豊後における山村家族と村落構造」を書いた。それが私の出発点となった。

五十二年、大分合同新聞社から『大分の歴史』全十巻が刊行されることになった。富來先生にさそわれて、八・九巻に執筆することになった。「できる限り原典にあたる」。それが、富來先生のたてた第二〇方針であった。それだけに資料を集めるのに苦労した。県立図書館には、ずいぶんとお世話になった。文章にも厳しかった。八巻の本文書き出しの、「時はいま慶応三年十月十日」の文章は、富來先生の発想をいただいたものである。

以後、大分県刊の『大分県史』近代篇をはじめ、大分大学教育学部の「地域総合研究論文集」などの仕事に携わることとなった。なかでも『国東半島』（一九八三・大分大学教育学部）に書いた「小熊毛・日吉神社の祭祀について―山人とその周辺―」は、二十五年、富來先生の指導のもと、初めて参加した国東半島調査のノートを基に再調査したものである。すべて富來先生の指導の賜物である。